

量子の世界と仏教思想

学長 高見 茂

みなさん、こんにちは。京都光華女子大学および短期大学の学長の高見です。今日はみなさんに学長講話をお届けしたいと思います。本来ならば四月の始めに、みなさんに対して講話をする予定でありましたけれども、新型コロナウイルスが蔓延しておりますので、その感染リスクを避けるという意味で遠隔の講座になりました。最後までご静聴いただきたいと思っております。

今日は宗教講座でありますので、宗教をどこかで取り上げなくてはいけません。宗教と科学がどう関係しているか、量子の世界と仏教思想をテーマにみなさんにお話をしたいと思います。科学と宗教、特に仏教思想との絡みはあまり聞く機会がないと思うんです。中には「本当かな」と思うようなことが出てくるかと思えます。専門的すぎて少し難しい話もありますけれども、どうぞ最後まで聞いていただきたいと思えます。

今日の講義内容の概要につきまして申し上げます。始めに、量子とは何かということ、量子力学の話を見せていただきます。そして、量子の世界、ミクロの世界がどういう特質を持っているかという話。そして、我々の日常にはなくてはならないスマホやコンピュータが機能する原理の中には量子の性質が取り込まれていますが、その技術的な応用の例として量子コンピュータの話を行います。そして最後に、仏典の説く世界と量子の世界の親和性について、非常に不思議な話でありますけれども、これを申し上げ、最後にまとめをさせていただきたいと考えております。

まず、通信スピードが4Gの一〇〇倍になった5Gが今年の四月から具体的に導入され、IOT (Internet of Things)、AI (人工知能) がどんどん進化しております。新しい技術を基にした量子コンピュータの登場で、ここ一〇年〜二〇年以内に標準的なコンピュータは全て量子コンピュータに変わっていくんじゃないかという話もあります。今日は、この先端科学の研究成果と、非常に古くさいイメーজのある仏教の世界が実は繋がっている、非常に不思議な符合がある、ということについて考察をしてみたいと思います。二〇〇〇年前の仏典に書かれていることが、近年の量子力学の世界に親和性を持っていると、いろんなところで言われておりますので、その辺りのことを少しお話させていただきます。

うと思っっています。

まず、量子とは何か。量子は、粒子（つぶ）と波の性質をあわせ持った、とても小さな物質やエネルギーの単位のことです。手のひらに、ある物質が乗っているとします。この物質を、細かく、細かく見ていきますと、その物質を形づくっている原子が出てきます。原子を形成しているものとして、電子、中性子、陽子……といったものがあります。原子核の中には陽子と中性子によって形成されていて、この陽子と中性子を結びつけているものの中に、中間子があります。さらに陽子や中性子を、細かく、細かく見ていきますと、さらに小さなクォーク、ニュートリノ、ミュオンといった微細なものが出てきます。実際に光は、粒であり波であるという性質を持つていますが、ニュートリノ、クォーク、ミュオンといった、原子、電子、中性子、陽子よりもっと小さな素粒子も、全て、この「量子」の中に含まれます。我々が日常目にするのとは違う、小さな、小さな、マイクロの世界を形成しているものが「量子」と呼ばれるものです。

原子や分子は、ナノサイズ（一メートルの一〇億分の一）よりも小さな世界です。このような極めて小さな世界では、私たちの身の回りにある物理法則（ニュートン力学や電磁気学）は通用しません。ここでは「量子力学」という、とても不思議な法則が働いていま

す。

それではまず、ミクロとマクロの世界の比較を試みたいと思います。私たちが日常慣れ親しんでいる世界はマクロ（巨視的）な世界で、この世界の運動法則は力学で説明され、大抵、目に見える大きさです。コップ一杯の水は目にすることができます。逆に、量子の世界はミクロ（微視的）な世界で、量子力学という、量子の世界にだけ通用する運動法則が理論的に体系化されています。これは目に見えないほど小さく、水分子を構成する原子や電子の世界です。

我々の日常生活の空間現象は、伝統的で古典的なニュートン力学で説明が可能ですが、ミクロの世界はニュートン力学では説明できません。量子力学でないと説明ができない、まったく別の世界です。ニールス・ボーアがこの量子力学の理論を構築したと言われていますが、量子（ミクロ）の世界の特質として、①粒であり波である、という量子の二重性を挙げています。我々の日常生活で、こういう性質を持っているものではありません。そして、②量子もつれ、という非常に不思議な現象が観察されると言われています。

まず、①粒であり波であるということは、一九六一年クラウス・イエソン、一九七四年ピエール・ジョルジョ・メルリらが「量子はスリットを通りスクリーンに痕跡を残す」と

いう二重スリット実験で明らかにしています。量子銃をスリットのあるもの目がけて発射すると、二本のスリットを通り抜けた量子は隙間を越えて当たりますから、二本の縦長の痕跡を残すだろうという仮説が成り立ちます。ところが実験してみますと、実際には何本もの縞模様が見れるんです。粒子だところはならない。どうしてこうなるのか。いろいろ考えてみますと、波としての特徴が生じているんじゃないかということです。スリットを越えると二つに分かれ、お互いの波が干渉したところが縞模様になって現れる。量子自体が波でないところという現象は起こりません。したがって、スリットを越えた量子は「波」としてふるまっていると理解することができます。ところが、非常に不思議なことなんです。観測装置を設置すると、量子のふるまいが変化して粒になってしまいます。人が見ていると粒になり、見ていないと波になる。ふるまいを変えるんです。我々のマクロ世界でこういう現象はなかなかありません。

この現象をまとめておきます。人間が観察していない時は「波」としてふるまい、人間が観察している時は「粒」として現れるという、この二重の性質をどう理解するか。量子力学の理論を構築したニールス・ボーアの「コペンハーゲン解釈」では、「量子は粒であって波である」いわゆる「量子の二重性」を前提に理解するしか、この現象の解釈はでき

ない、となつています。非常に不思議ですけれども、ミクロの世界ではこういうことが起こっています。量子は、「粒」⇔物質、「波」⇔エネルギー。物質であり、エネルギーであるという、両方の性質を持っています。

私たちの体や、周りのものを形成している超ミクロの量子は、非常に不思議な振る舞いをしていて、人間が観察すると「波」が「粒」に変わる。人間の意識が関わると「エネルギー」が「物質」になる、と理解されるわけです。非常に不思議ですけれども、ミクロの世界ではこういうことが起こっています。

物質化するということはどういうことか。実際に存在する、存在を認知できる、ということ。さらに深めると、人間の意識（観測）が介入しないと実在しない。量子力学ではこのことを「非実在性」と呼んでいます。人間の意識が介入するまで、量子の状態は何も確定しない。すべての状態は「確率として存在」しているということです。我々が見ているマクロの世界、我々の肉体や、あらゆる物質…、例えば、今、私はここにボールペンを持ってあります。形はボールペンですが、細かく、細かく、微細なところまで観察すると、原子、さらに原子核、中間子、陽子…「量子」で形成されています。そもそもエネルギー状態で、人間の意識が介入すると物質化（確定物）する、人間が直接認識できる対象

になる。これが量子の特徴です。

量子力学は、ニュートン力学から派生する古典物理の世界観とは乖離しています。かけ離れております。古典派物理学は、マクロ世界の現象について説明することは可能です。私たちが日常、見たり、聞いたり、知ったり、触れたり、感じたりできる世界は上手く説明できます。これはミクロと比べると対象が大きくて、少々の誤差は無視できるからです。自然にある物理法則は、人間の意志と全く関係なく、独立した法則で動いているように観察されます。あるものは元々ある。人間の意識とは関係なく存在する。しかし、この考えに異を唱えたのが哲学者のゲーテです。「自然は観察する者と観察されるものが一体となった時初めて実像を現す」。どこで感じたのか分かりませんが、量子世界の性質を提示しているわけです。これは極めて不思議です。

ここでもう一度まとめておきます。私たちが日常、見たり、聞いたり、感じたりしている世界はマクロの世界であって、非常に巨視的な世界です。その存在確率は、あるか、ないか。一〇〇%か、〇%か、しかありません。ところが、量子（ミクロ）の世界は、存在確率が五〇%になることもあります。波であり粒である、どっちつかずの状態として存在することができ、人間が観察することによって、エネルギーや物質に変わるからです。私

たちは、あるか、ないか、というマクロ世界に慣れているわけですが、ミクロの世界ではそうではない物理法則が働いているということですよ。マクロの世界では観測されても状態は変わりません。ところが、量子（ミクロ）世界では、観測されると状態が変わります。波が粒になる。そして「重なり合った状態」が存在します。マクロの世界ではそんな状態はありません。だから、我々はこれをなかなか信じるのがでないんです。

では、ミクロの世界をマクロの世界に拡張するとどうなるのか。「シュレーディンガーの猫」という思考実験があります。箱の中に猫と、原子の崩壊を検出すると青酸ガスを出す装置を組み立てておく。①一時間後に箱の中には「放射性原子が崩壊していない状態と崩壊した状態が一对で重なり合った状態」が存在する。②原子の崩壊を検出すると装置が青酸ガスを出し、猫が死ぬ。③つまり、一時間後に箱の中には「猫が生きている状態と死んでいる状態が一对で重なり合った状態」が存在する。④そして、観測されることによつて「猫が生きている状態」か「猫が死んでいる状態」に収束する。こういうことが実験できれば、箱を開けるまで、生きている猫と死んでいる猫が同時に存在する、人が箱を開けて観測することによつて、どちらかに収束する、こういう実験ができるんじゃないかと、シュレーディンガーさんは言ったわけですよ。ところが、今の科学技術の元ではこの実

験をやることができないんです。これが「確かにそうだ」と証明されると、マクロの世界とミクロの世界の繋がりがかなり分かるんです。ミクロの世界では、猫が生きている状態と死んでいる状態が、重なり合った状態が存在している。ところが、マクロの世界では、生きている猫なのか、死んでいる猫なのか、どちらかなんです。だから、マクロとミクロの世界を繋ぐような実験ができれば、マクロ世界とミクロ世界の関係がある程度分かるようになるわけです。残念ながらこの実験は今の技術ではできません。頭の中ではこういうことをやったら面白いんじゃないかということは分かるんですが、これはなかなか出来ないうんですね。

これをもう少しまとめてみますと、量子の世界では重なり合った状態が存在する。箱の中には生きている状態と死んでいる状態が両方ある。人間が箱を開けることによって、どっちかだと収束するわけです。ところが、マクロの世界では、いるか、いないか、どっちかしかない。観察されても状態は変わらない。まず私たちの日常生活の中で重なり合った状態は見られないということなんです。ですから、ミクロの世界と、マクロの世界の繋がりを実証できないと、なかなかこういう話は確かめられないんですね。

今の段階では、ミクロの世界とマクロの世界を直接結びつけて話を進めることはできな

いんですが、ミクロの世界の不思議な解釈で、コペンハーゲン解釈ともう一つ、一九六〇年代に提示されたエヴェレット解釈があります。「世界は可能性の数だけ存在する」という多次元世界を提示した学者がいるんです。パラレルワールドの存在です。猫が生きている世界へ我々は瞬時にレポートできる。観察することによって我々が感じていない世界に入っていける。いくつもの世界がある、という理論を提示した人もおります。

マクロ世界の説明原理（古典物理学）は、「エネルギーなどのすべての物理量は、連続量である」ずっと繋がっている。ミクロ世界の説明原理（量子力学）は、「エネルギーは、連続量ではなく、とびとびの値（離散量）しかとりえない」（これは高等学校で勉強されたと思います）。連続量と離散量の違いですが、連続量で時間を示しているのがデジタル時計です。秒針が一秒、一秒、動いていく離散量で時間を示しているのがアナログ時計です。しかし、連続量でずっと繋がっている一本の線をミクロの世界まで拡大していくと、かなり間があいていて、離散的な状態になっているものが結構あります。この例から考えますと、ミクロ世界とマクロ世界はどこかで繋がっているんじゃないかなという気がします。

①は、一つの量子が「重ね合わせ」の性質を持っている、いわゆる、粒と波の両方の性

質を持つている、という話だったんですが、②量子もつれは、複数の量子が一つのもののように振る舞う現象、多体系の「重ね合わせ」を言います。原子核の周りを回る電子は自分自身も右回転、左回転しながら、原子核の周りを上向きスピンドで回るものと、下向きスピンドで回るものが、合体したようになっていんです。量子もつれ（量子エンタングルメント）は、元々一つの量子が何らかの影響で、二つの量子AとBに分裂した場合、もつれあいの状態にあると言います。ケースIは、Aは上向きに回転している、Bは下向きに回転している、この両方が重ね合わさっているような状態。ケースIIは、Aが下向きに回転している、Bが上向きに回転しているような場合です。人間の意識の介入によって、Aを上向きだと観測すると、分裂したBがどんなに離れていても、例えば、日本とアメリカぐらい離れていても、あるいは何光年離れていても、瞬時に逆向きのスピンドである性質を現すわけです。ケースIIも、Aを観測して下向きだと人間が観測すると、Bを京都から東京へ持つていって箱に保管していても、人間がその箱を開けて観測すると、Bは瞬時に上向きスピンドになるんです。両者がどんなに離れていても、瞬時にケースIかケースIIが決定されます。ミクロの世界は非常に不思議です。光の速さを越えて、瞬時にもつれあいになる、片一方が決まるともう片一方も同時に決まる、こういう性質を持っています。

二、三年前に、『君の名は。』という非常に画像の綺麗なアニメーションがありました。日本の中部地方の村に彗星が落ちてきて、遠くに離れている男の子と女の子が入れ替わる話で、彗星が落ちて村が壊滅した世界と、そうでない世界が同時に出てきます。これは全部、量子というものの不思議な性質を取り入れた話なんです。ご覧になった方もおられると思いますけれども、あの話は、量子もつれとか、量子の二重性とか、パラレルワールドとか、いくつもの世界があるとか、どこに行くかは決まってる。お互いに関係のある、もつれあっている量子は、どんなに離れていても瞬時に繋がる、というような話でしたね。

量子テレポーテーションは、私が非常に好きなSF映画『スタートレック』で、転送装置として出てきます。パラレルワールドをテーマにした先ほどの『君の名は。』も、こういうものから発想を得ているわけです。もつれあっている光子、二つの性質を持っている光子を分裂させると、双子の光子となって一体として振る舞います。どんなに離れていても瞬時に情報が伝わる優れものです。量子はこういう特徴を持っています。

この量子の原理は、次世代のコンピュータに使われております。私たちが日常使っているスマートフォンは、量子の重ね合わせの性質を使って、我々の生活の利便性向上のため

に非常に大きな役割を果たしてくれています。あらゆる電子デバイスにも利用されています。現在のコンピュータとの違いですが、これまでのコンピュータは、0か1かの組み合わせで計算をしていく。0か1かのシリーズを計算して、また計算して…と順々にやるんですが、量子コンピュータは、全部を重ね合わせて一気に計算しますから、ものすごく早いスピードでできるんです。これだけの内容でみなさんに説明するのは難しいです。で、簡単に申し上げますが、現在の世界最速は、理化学研究所が神戸に持っている「富岳」というコンピュータですが、このコンピュータで計算して欲しい一万年ぐらいかかる計算を、量子コンピュータでやりますと、いいですか、本当にビックリしますけれども、昨年Googleが開発した量子コンピュータでは、わずか三分二十秒で出来たという報告がございます。現在、我々が使っているコンピュータの一五億倍の速さです。一万年かかる計算を三分二十秒でやってみせる。これを「量子超越」と言います。これから五年、二〇年経った段階では量子コンピュータが一般化していることになると思います。これも量子のもつ非常に不思議な性質を使っています。

コンピュータの原理ですが、一つの量子が上向きなのか下向きなのか、両方が同時に存在している場合に、量子は重さね合わせになっていますから、上の色が「白だ」となった

ら、自動的に、宝が入っているか入っていないか、即、判断ができる。「黒だ」となれば、上が宝がない、下に宝がある、という繋がりを持っていますので、片一方を観測すると、同時に量子もつれの状態で、観測結果が即座に出てくるという量子の性質を活用しているんです。

さて、「仏典の説く世界」は今日の重要なテーマです。ミクロの世界の量子と仏典がどんな関係になっているのか、どういう関わり合いがあるのか、ということについて少しお話を申し上げたいと思います。今ちよつと難しい話をしまして、みなさんご理解いただきにくかったかもしれませんので、もう一度復習をしたいと思います。量子の状態というのは、観察するまで「重ね合わせ」の状態である。粒であるか、波であるか。例えば、光の粒は波であり、重ね合わさっている、二重性を持っている、ということなんです。もう一つ、電子は、上向きに回るものと、下向きに回るものが、重ねあわせの状態で存在しています。どっちになるかは決まっていない。人間が観察して、片一方が上向きだったら、もう片一方は下向きであることが自動的に決まる。これが量子の世界の特徴でした。ミクロの世界では、現象は「どう見るか（どう意識するか）」で決まるということです。ここは非常に重要なポイントです。これが仏教思想と深く繋がると言われています。

みなさんよくご存知の、チベットの仏教指導者であられるダライ・ラマ十四世殿下です。現在、チベットからインドのダラムサラに亡命して、亡命政権がダラムサラにありまされども、宗教指導者として非常に高名で、ノーベル平和賞ももらっていらっしやる方です。この方は常に、宗教界と科学界の融合と協働を提唱しておられます。インド人物理学者ラジャ・ラマナ博士と交わしたいろんな対話ですが、

「一五年から二〇年くらい前、ある会議でインド人物理学者のラジャ・ラマナ博士がナーガールジュナ（龍樹）の仏教思想と量子論との一致があまりにも多いことに驚きを禁じ得ないと話してくれました」

と言っておられます。

「（インド）のプレジデンシー大学の副総長が以前、量子力学によれば客観的に存在するものは何もない（人が意識してはじめてエネルギーであったものが物質（粒）になるといふことです）。ことを教えてくれましたが、これは瑜伽行派（ゆがぎょうは）

と中観派の見解との一致を思わせるもので、特に物事は説明の仕方によってのみ存在する（元々ものが存在するということは一切ない。人間が意識することによって存在がある）というナーガールジュナの仏教思想と同じものなのです」

ナーガールジュナは大乗仏教における中観派の祖で、「空（くう）」の思想を説いた方です。空の思想によれば、「物事には実体はなく、あるプロセスの途中の姿として認識（中観）されているだけ。無でもなければ有でもない『空』である」と提示されています。

さて、「空」の思想を現している仏教経典があります。『般若心経』です。「空」の本質をわずか二六〇〜二七〇文字の漢字のみで伝える、仏教上、とても重要な経典です。我々の真宗大谷派では『般若心経』を重要な経典として取り上げていないのですが、ここでは重要な経典です。よく出てくるのが「色即是空」「空即是色」。これを現代語訳しますと、「実在する物や出来事（色）は実在しないもの（空）であり、実在しないもの（空）は実在する物や出来事（色）でもある」。つまり両方の性質がある。いわゆる量子の二面性に通ずるということになるんです。粒として存在する、波として存在する。それに照らしますと、粒は実在する物質であり、『般若心経』の「色」に当たるものです。波は、エネルギー

ギーであり実際に私たちは感知することができませんので、「空」に当たります。重要なのは、二〇〇〇年以上前の、漢字のみ二六〇〜二七〇文字で整えられた非常に重要な仏教経典『般若心経』に、量子の世界の一面が著されているという点です。

それからもう一つ、大事なことを申し上げます。右にあるのは東大寺の大仏です。東大寺は華嚴宗のお寺ですので、『華嚴経』を大切にしておられますが、この中に「唯識の基本思想」が説かれています。

三界は唯心の所現

三界は、欲界、色界、無色界の三つの世界を指しています。欲界は、目で見ると、耳で聞く、鼻でおいをかぐ、舌で味わう、身体で触れる、感じる…という五色（五欲）の世界で、人間の住む世界です。色界は、一般の人たちが心の中で描く世界のことです。無色界は、物質が消滅して精神だけの世界です。経典では、

三界は虚妄にして但だ一心の作るところ

世界は、我々がそれをどう見るかに応じて出現する

三界のすべては心から変現したものであって、心を離れては存在しない

量子は、ミクロの世界で「重ね合わせ」「量子もつれ」という物理現象を持っています。人間の意識や心によって状態が一定に収束する、という特徴も持っています。量子の世界では一般相対性理論が反映されません。量子力学、量子論でも完全な理論ではありません。これを、重力の理論と統合するような理論として、みなさんも聞いたことがあるかもしれません。これが、「ひも理論」が提唱されています。量子（素粒子）は、振動する「ひも」だということです。小さな、小さなミクロの世界では、私たちの身体を作っている原子も、ひもが振動しているんだと。この「ひも」の振動パターンの違いが、様々な量子（素粒子）として現れてきている。振動パターンの違いが、量子の違いになり、原子の違いになってきていると理解できるわけです。

この一本のひもは、バイオリンの弦に例えられます。ド、レ、ミ…と、ひも理論が我々の身近なところまで来ているんですね。「振動している」というのが、ひも理論の原理です。一番小さなもの、クォークよりも、究極的に小さなものの考え方として、ひも理論が

あります。これは仮説として提示されています。まだ実証されていません。ですから、本当に量子より小さい世界はひもで出来ているのか？ もし、ひもで出来ていたら、バイオリンの弦に例えられ、振動のパターンの違いが様々な量子を生みだしている、こういう理論が提起されているところです。

空海が『声字実相義』という本の中で、「五大にみな響きあり」と著しておられます。五大は、我々を取り巻いている宇宙のことです。宇宙には響きがある。一本のひもがバイオリンの弦のように振動して、ド、レ、ミ…と音を出すように、物質の違いをもたらししている。このように量子の世界を不思議なくらい反映した理論になっています。

まとめに入ります。量子の世界は、仏教思想と強い相関があります。物事は初めから決まっている（実在している）のではなくて、観測（意識）することによって収束（決定）する、という理解です。観測することによって、波であるのか、粒であるのかが決まってくる。左回りであるか、右回りであるかが決まってくる。意識の影響は極めて重要なんです。ミクロの世界では意識が物事の状態を決定します。従いまして、意識・念・心のあり方が、我々の境遇と環境を決めている。自分がどういう意識を持つかによって、境遇を決

めていると考えることができます。教育の場においても、まったくその通りじゃないかと思えます。ですから、みなさんどうか、Mind Setを変えてください。自分はこのままでしか到達できないとか、なんぼ頑張ってもアカンだろうとか、そういうMind Setを捨て去っていただきたい。いわゆるFixed Mind Set（固定思考）、どうせ捜しても見つからへんわ、いくら勉強しても良くならへんわ、という固定思考は拭ってください。どんな場合も、頑張れば必ず物事は成就します。今はしんどいけど頑張ろうという、前向きな意識で努力していただくことが必要なのではないかと思えます。

Fixed Mind Set（固定思考）からGrowth Mind Set（成長思考）へ変えてください。アメリカの心理学者、キャロル・ドゥエックが提示されていますが、才能とか、知能とか、性格は、一生変わらない…、これは固定思考です。「私は勉強は不得意やし、なんぼ頑張ってもアカン」という意識になつてもらったら困ります。こういう状況の人は伸びないんです。才能、知能、性格は、いくらでも変えられる。工夫し、最後まであきらめることなく、一生懸命頑張つたら必ず達成できる。これを信じて頑張るといふことです。こういう姿勢の人、Growth Mind Set（成長思考）の人は、そういう心の持ち方で進んでいくんじゃないかと思えます。

米国では、人生の成功を決めるのは、才能とか、知識とか、性格、ある程度影響を与え
ると思いますけれども、それよりも、才能と、知能と、性格、これがきっちりしていれば
必ず成功します。いくらでもこれは変えられるんです。成長思考を持って頑張るんです。
最後までやりぬけば、必ず物事は成就します。

ミクロの世界の中の話は、私たちの身体を作っているということを見ても、マクロの
世界の中の話に、繋がっているわけです。ですから、最後、自分がどういう意識を持っ
ているか、どうするのか、ということまで、量子の状態は決まってる。ですから、前向
きに頑張る。とにかく、最後まで努力して、どんなに苦しくても頑張るといふ、積極的な
前向き姿勢を、ぜひぜひ、持っていたきたいというふうに思います。どうか、固定思
考ではなく、成長思考で物事を考えて進んでいただくことが、極めて重要なことである
ということにつきまして、量子の世界の現状を踏まえて、仏教の經典の中に、どうい
う話が出てくるか、どういうふうに捉えられているか、ということについて少しお話を申し上げ
ました。

ということとは、仏教の教えとか、宗門校は古くさいという感じがしますが、今や
物理学の最先端を走っている、量子力学の理論的な教えと、仏教の經典に書いてあること

が、かなり密接な関わり合いを持っているということについて、ご認識をいただきましたでしょうか。ですから、キャロル・ドウエック先生が言ってるように、固定的な思考、もうやったって一緒やと、一生変わらへんということじゃなくて、いくらでも、才能とか、知能、性格は変えられるんです。そういう成長思考を、ぜひぜひ、持っていたきたいと思います。ある意味じゃ、これは自然科学、物理学、量子力学の話と、こういう教訓とは、どこかで繋がっている可能性があると思いますし、これから科学技術の研究は進みますと、先ほど申しましたパラレルワールドとか、あるいは「シユレーディングの猫」の実験とか、ちゃんと出来たら両者が繋がる。ミクロの世界とマクロの世界が繋がっているというような話で、これを応用したような、いろんな技術が導入されてくるんじゃないのかなと思っております。

今日は、量子の世界の非常に不思議な振る舞い方、人間が意識することによって初めて一つのものに収束する、固定化するということから、我々は心の持ち方を、前向きに、前向きに、前向きに、成長思考で持つということは、いかに我々の環境とか、境遇というものに、大きなインパクトを持っているかということに、これは話が繋がっていくんじゃないのかなと思っております。甚だ宗教講座としては雑ばくな話でございますが、

最先端の量子力学の話と絡めまして、仏教思想のご理解をいただければよろしいのではないのかなというふうに思っているところでございます。

本日は本当にありがとうございます。どうか、これから、京都光華女子大学の四年間、あるいは短期大学の二年間、しっかりと頑張っていただきたいと思います。今後のみなさんのご発展をお祈りしております。本日はどうもご静聴ありがとうございました。